

稲育苗期のいもち病防除には

ベンレート[®] **殺菌剤** 水和剤

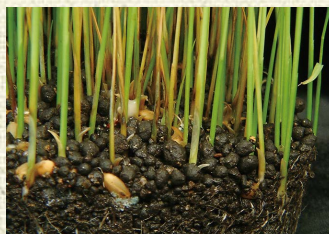


ベンレートは住友化学(株)の登録商標です。

いもち病防除につかえる。
種子消毒や育苗箱灌注処理でつかえる。

稲

苗いもち



苗に発生した葉いもち





稲育苗期のいもち病に高い効果を示します

- ・種子消毒や育苗箱灌注処理で、種もみ由来の苗いもちに高い効果を発揮します。特に種子消毒では、種もみ内部にまで感染したいもち病菌にも効果を示します。
- ・育苗箱灌注処理では、外部からの飛び込みによるいもち病にも効果を示します。

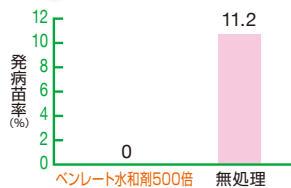
上手な使い方

DMI剤等のほか苗病防除薬剤(種子消毒)との組み合わせで使用してください。

適用病害と使用方法

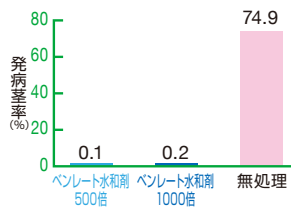


防除効果



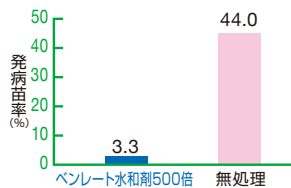
種子浸漬

住友化学(2006)
品 種: ヒノヒカリ
処理日・方法: 6月21日 500倍24時間種子浸漬
播 種 日: 6月26日
調査日・方法: 7月14日 苗いもちの発病苗数を調査し、発病苗率を算出



育苗箱灌注

徳島県植物防疫協会(2003)
品 種: キヌヒカリ
播種・処理日: 6月18日
処 理 方 法: 播種時に500倍および1000倍液を1箱当たり500ml灌注
調査日・方法: 7月2日 苗いもちの発病茎数を調査し、発病率を算出



苗の葉いもちに対する効果

住友化学(2003)
品 種: コシヒカリ
播種・処理日: 10月15日
処 理 方 法: 播種時に500倍液を1箱当たり500ml灌注
接種日・方法: 10月30日 孢子懸濁液を噴霧接種
調査日・方法: 11月12日 葉いもちの発病苗数を調査し、発病苗率を算出

2025年6月現在の登録内容(太字は2023年1月25日適用拡大)

作物名	適用病害虫名	希釈倍数または使用量	使用液量	使用時期*	本剤の使用回数*	使用方法	ペノミルを含む農薬の総使用回数*
稲	いもち病、ばか苗病 イネシソガレセンチュウ	乾燥種粗重の0.5~1.0%	-	は種前 (浸種前又は浸種後)	1回	種子粉衣	2回 (種子への処理は1回、 床土への混和は1回)
	いもち病、ばか苗病 イネシソガレセンチュウ	30~50倍				10分間種子浸漬	
	ばか苗病	30倍				6~24時間種子浸漬	
	いもち病	500~1000倍				12~24時間種子浸漬	
	イネシソガレセンチュウ	100~500倍				24時間種子浸漬	
いもち病	7.5~15倍	乾燥種粗重1kg当り 希釈液30ml	乾土	種子吹き付け処理			
稲(箱育苗)	いもち病	育苗箱(30×60×3cm 使用土壌約5ℓ)1箱当り1g	-	は種前	2回	床土混和	
	いもち病	500~1000倍	育苗箱(30×60×3cm、 使用土壌約5ℓ)1箱当り500ml	は種時~ は種14日後まで			
	いもち病	1000倍	育苗箱(30×60×3cm、 使用土壌約5ℓ)1箱当り1ℓ	は種時~ は種7日後頃			
	苗立枯病 (フザリウム菌)	500~1000倍	育苗箱(30×60×3cm、 使用土壌約5ℓ)1箱当り500ml	は種時			
苗立枯病 (トリコデルマ菌)	1000倍	育苗箱(30×60×3cm、 使用土壌約5ℓ)1箱当り1ℓ	は種時1回又は は種時と は種7日後頃の 2回	灌注			

●稲以外の野菜・果樹・花等にも登録があります。*印は収穫物への残留回避のため、その日まで使用できる収穫前の日数と、本剤およびその有効成分を含む農薬の総使用回数の制限を示します。

⚠️<使用上の注意事項(抜粋)> 詳細はラベルをご参照ください。

- 使用量に合わせ薬液を調整し、使いきってください。
- 水稻の種子消毒の場合は下記の注意を守ってください。
 - (1) 消毒前に塩水選を行ってください。
 - (2) 消毒後は水洗いせずに浸種又は播種してください。
 - (3) 薬液の温度は10℃以下をさげてください。
 - (4) 粉衣処理では付着をよくするために予め種子を湿らせ(塩水選水切り後など適当)湿粉衣してください。
 - (5) 浸種後処理は種子が腐敗の時期になるまでに行ってください。
 - (6) 本剤処理を行った種子の浸種に当っては次の注意を守ってください。
 - ① 処理後、種粉を十分風乾してから行ってください。
 - ② 浸種は停滯水中で行ってください。
 - ③ 種粉と水の容量比は1:2とし、水の交換は行わないでください。ただし、水温が高く種粉が酸欠不足になるおそれがある時は静かに換水してください。
- いもち病に対する本剤の育苗箱灌注処理は、本田で発生するいもち病に対しては効果が期待できないので注意してください。
- 薬液が育苗箱からこぼれないように処理してください。また、土壌全面に不透水性無孔シートを敷くなど、薬剤処理後の灌水による土壌への浸透をさげてください。
- 本剤及び同系統の薬剤の連続使用によって薬剤耐性菌が出現し、効果の劣った例があるので過度の連用をさげ、なるべく作用性の異なる薬剤を組み合わせで使用してください。
- 本剤を使用した場合には、チオファネートメチルを含む剤を使用しないでください。ただし、種子への処理、種粉への処理および塗布処理は除きます。
- 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬害の有無を十分確認してから使用してください。なお、普及指導センター、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- 眼に対して弱い刺激性があるので眼に入らないよう注意してください。眼に入った場合は直ちに水洗してください。
- 皮膚に対して弱い刺激性があるので皮膚に付着しないよう注意してください。付着した場合には直ちに石けんでよく洗い落とすしてください。
- 使用の際は農業用マスク、不浸透性手袋、長ズボン・長袖の作業衣などを着用してください。作業後は直ちに手洗、顔などを石けんでよく洗い、うがいをするとともに衣服を交換してください。
- 作業時に着用していた衣服等は他のものとは分けて洗濯してください。
- かぶれやすい体質の人は取扱いは十分に注意してください。
- 本剤で処理した種子等は食料や動物飼料として用いないでください。
- 水産動植物(甲殻類)に影響を及ぼすおそれがあるので、河川・養殖池等に飛散、流入しないよう注意して使用してください。施設内に水産動植物を飼っている水槽等を置かないでください。
- 使用残りの薬液が生じないように調整を行い、使いきってください。散布器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さないでください。また、空容器・空袋は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理してください。
- 直射日光をさげ、なるべく低温で乾燥した場所に密封して保管してください。

●使用前にはラベルをよく読んでください。●ラベルの記載以外には使用しないでください。●小児の手の届く所には置かないでください。●空袋・空容器は圃場等に放置せず適切に処理してください。 2025年6月作成